

介在しているというごく当り前のことに気づいたに過ぎないことだったが、実感的には驚きであった。また、実験室やさまざまなテスト場面での子どもの行動が、家庭訪問や母親との面接で得た子どもの行動とは、随分と異なることもあること、さらに、毎年継続的に観察を行って見て、比較的安定するような行動の特徴があることや、かなり大きなパーソナリティの変化を遂げる子どももいて、しかもそれは家庭内の力動的な人間関係と密接に結びついていることなども知った。また、東洋先生をリーダーとする「日米幼児教育研究」のメンバーに加えていただき、心理学的概念の文脈規定性というか、それぞれの文化においてその概念がいかなる役割をもっているのかを理解することの重要性をつよく感じた。こうした経験から、発達における生態学的アプローチの必要性を現実的に感じた。

しかし、多くの若い研究者にとってこのようなおおがかりな縦断的研究のスタッフとして参加する機会は限られてくるし、自分自身で実際に取り組むことも現実には難しい。そこで、どうしても狭い意味での実験室的な研究や成果が比較的早く出やすいような研究に集中しがちになる。これからは、若い研究者がそれぞれの責任の範囲で参加できて、しかもそこでの成果を共有できるようなプロジェクト研究のありかたをもっと探ってもよいのではなかろうか。

## (2) 熟慮性・衝動性の研究について

さきの日米幼児教育研究でも、日本の子どものほうが熟慮性・衝動性の後の認知能力に対する予測力が大きかったが、これは日本の家庭や学校における認知的社会化において熟慮的な取り組みかたが特別に重視されていることを示唆するものである。この分野の研究の展望をかかつて行ったことがあるが、自分も含め多くの研究はアメリカの研究の追試的なものが多く、日本という特別の文化・社会的文脈においての新たな概念化が必要であることが痛感された。また、熟慮性・衝動性の先行および後続変数の探究をめざした発達の研究もきわめて不足しているため、継続的研究もふくめこの分野での確実なデータの蓄積を今後とも続けていきたい。

## (3) 教員養成大学での実践的課題

教育実習での学生の指導もしなければならない立場上、自らの大学での講義や実験などのありかたについても深刻に考えなければならなくなってきている。また、私たち研究をする者と実践をする人たちとのコミュニケーション・ギャップを感じることも多い。たとえば、教育の現場でよく使われる心理学的言葉（発達段階、態度など）についても誤解があったり、心理学の概念が単純に日常語で置き替えられていることも少なくない。私た

ち研究者は現場を知ることはもちろん重要だが、まずこれらの概念をもっと分かりやすいかたちで説明ができるように努めるとともに、現場での現象にもっとピッタリした心理学的概念を案出することが必要ではなかろうか。要するに、教育の現場ともっと共通語でコミュニケーションできるようにならなければならないと思うし、そのための努力が必要だと思う。

## 自己の問題意識・方法論とかかわって

内田 伸子

### 〔問題意識・テーマ〕

心理学徒として歩み出して以来、ことばを手掛りにして人間の認識とその発達過程を知りたいと考え、幼児、児童、大人を対象として実験研究を行ってきた。その中で「わかる」（文章理解、75年～）・「つたえる」（会話、80年～）・「つくる」（文章産出、75年～・作文、80年～）を統合する視点と方法論を持たなければ、所期の目的は達せられないと考えるようになった。その背景には、過去10年位の間起こった3つの「変革」がある。

### 〔問題意識や方法論を規定したもの〕

第1に、認知科学が台頭し、日常の認識の問題を取りあげようという気運が高まり、課題や分析方法に従来みられなかったような「自由」が認められるようになった。これによって、実験心理学的禁欲主義から解放される思いがした。同時に、人工知能、言語学、哲学等の「他者の目」で心理学的知見の意味を問い直すきっかけが与えられた。

特に文章理解や算数・物理問題の解決のような題材のもとで、発達主体の既有知識や能動的な情報処理の重要性を示す具体的証拠が見出されたことにより、行動主義的教授理論とは異なる角度からの、教授に関する認知理論の可能性が見えてきたように思われる。

第2に、母子交互作用に関する生態学的アプローチが盛んになるにつれ、特定の経験と特定の行動変化を対応づける短期的実験でうちたてようとした法則の「生態学的妥当性」を考えるようになった。また観察者が介入したことによる母子関係の変化や子どもの変化と母子関係の微妙な影響のしあいが指摘されたことで、研究者と研究対象の人達の関わりの意味を問い直すきっかけが与えられた。

私自身も、生態学的・介入的プロジェクト（放置児のケースや、乳児観察、保育観察）に参加する中で、例えばある時点で遅滞しているとみなされた能力が、後の成長のパネになったり、遅滞を克服・補償する能力を発達させることを実際にみることができ、人がきわめて高い自己調節能力を持つものであることを実感した。このこ

とを通じて長期的なスパンで行動の変化をとらえなくてはならぬこと、さらに人の認識を明らかにするためには情動の問題を組み込んだ研究を行っていかねばならないことを再認識させられた。

第3に、発達研究において、大人と子どもの差異を明らかにする段階から、両者の類似性、共通性を探そうとする段階へと移行したことにより、何が発達するかについてのより洗練された発達理論が求められるようになった。

以上の心理学史上に起こった「変革」は、科学としての心理学のあり方をメタ化するきっかけを与えると共に、自分自身の仕事の意味を問い直す契機ともなった。

今は、自分のテーマを追求するために、現実に存在する認識発達の実際をみるような生態学的アプローチ（短期・長期の縦断観察や授業観察）と抽象的形式において認識の発生的過程を明らかにするような実験的アプローチとを組み合わせていくこと、すなわち、子どもの行動の変化を、いくつかのレベルで抽象化する、そのために、いくつかのアプローチをゆきつもどりつしながらとらえていくのがよいと考えている。

〔教育心理学が目ざすこと〕

ここ5年位、私は教育の問題を心理学的方法により解決できるのではないかと考え、実践に関心を払い、それに近づこうと努力してきた。文学作品や説明文の理解、作文や推敲の過程など授業に密着した題材をとりあげてきた故、実践に「役に立つ」研究ができると（楽天的にも）考えたのだ。

しかし、今はこれは少し違うのではないかという気がしている。たとえ題材が実践に密着しているからといって、それだけでは実践に直結する研究にはなりえない。

第1に、実践につながるかどうかは、子どもの行動変化をどの水準でとらえようとしているかによるのである。

第2に、研究成果がどのような形で実践に伝わるかという問題である。これは研究者の力量の問題に留まらず、適切なインタープリターがいるか、あるいは、実践者の側が柔軟かどうかということも関わってくるのである。

研究成果が「役に立つ」という時にはいろいろなレベルがある。具体的な教育プログラムが教授方法を変えるという直接的なものから、研究が提起した現象のとらえ方が実践者のものの見方にインパクトを与え、研究成果が子ども観を変え、人間を理解することに役立つといった間接的なものまでいろいろありうるのである。

そのようなことを踏まえた上で、自ら、自分の研究がどのような意味があるか、どのような意味で誰にとって

役に立つのかを吟味する目は常に持ち続けなくてはならないと考えている。

## 学習研究から教授—学習研究へ

梶田 正己

筆者自身が発表したことから書き始めると、シンポジウムでは2つのことに触れた。1つは城戸賞受賞当時の実験的な学習研究から教授—学習研究にテーマが変わったこと、もう1つは、クロンバックが既に、30年前にアメリカン・サイコジストで指摘していることだが、学習研究が実験的研究の伝統を強くうけ継いでいるということ。特に後者に関連して、教授—学習研究は個人差ないしは個性の研究が必要ではないか、と述べた。

言うまでもなく、基礎的・原理的な心理学の研究は、一般的な因果関係法則を追究しているから、現実とのかわりが薄い。個人的な体験から言って、筆者の行っていた弁別学習などの学習の研究をしていても、例えば、子どもの学習をどうしたらよいか、というような現実の具体的な課題には応えられない。それは当然のことであるが、しかし、研究者の心の中には、どうしても研究に手応えがない、という感じが残ってしまう。筆者が30代の半ばに、教授—学習研究へ方向転換したのは、こうしたところとつながりがあるように思う。もちろん、実践的課題から手応えがなくとも、学会などの研究者のコミュニティから反応があればそれでよい、という考えも成り立つし、筆者も当初は、研究の価値は研究者集団がそれをどう評価するかによるのではないかと考えていた。しかし、教育心理学の研究について、それでいいのだろうか、それほど楽観できないのではないかと、という疑いを抱くようになった。シンポジウムで、研究にはリアリティー・テストがあるのではないかと述べたのはこうした自身の気持を率直に表わしたものである。

次に教授—学習研究では個人差とか個性に重点を置いた研究が必要ではないかと述べた。この点について、若干言葉が足りなかったように思う。クロンバックがいう2つの学問的伝統は研究の方法論に言及したものである。1つは因果関係を追究する実験的研究法であるし、もう1つは相関的研究法である。学習や教授—学習研究は単純に統計をとると、確かに、前者が圧倒的に多いように思われる。だからバランスを取るために、相関的研究法を使った研究がある程度は必要だ、と言うわけではない。研究の方法はあくまでも方法に過ぎないので、結局、方法よりは問題意識が先立つことになるだろう。個人差や個性を研究のテーマとするような問題意識が基本をなすように思われる。筆者が数年前から始めた、学